

主從心得草
上

1540
10-1

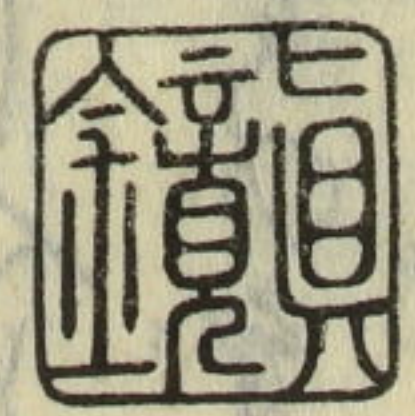


依て文理も属せぬ文字の相違あり。又音借
のいやうさおもり見ず。只早く合意の仕安
をばしと人爲の属し。唯何れあはれ
て書しつたる也

文政六未歲正月善修日

東都淺草新寺町

壽福軒眞鏡述



王従心傳の事

卷の上

利運法の如し利運あり。史富貴榮華の上下方に
好く負之困窮の上下方に。ひを地地上下の
苦を地地上下の苦。樂い事い上下の樂
骨形細く事い上下の事い。是人情の常也。如
少心の如しと書て。こがやと事い。人いほい
半ふれといふ儀也。後より。家身はめりて人の
やがれといふ。おのれが好む事い。他人も好む事
後同好ふれ。他人情をうさて。他人をわく事い。

他者さん己の心苦しむ。何れ苦樂順逆たる苦也。相はゆる
何れ苦樂順逆たる樂あり。下愚の人心ゆるらある。能
人とあはらる。賢あり。愚も。中。此もあはらる。人の
何れととらる。

人のせんぬる者。何れや。得たる所あり。得たる所あり。
是れ得たる所あり。何れや。何れや。一人の
身に。何れや。備まる人あり。何れや。何れや。何れや。
用ひ。得たる所あり。責ある。何れや。何れや。何れや。
何れや。其の何れや。何れや。何れや。何れや。何れや。

何れや。得たる所あり。何れや。何れや。何れや。何れや。
何れや。何れや。何れや。何れや。何れや。何れや。何れや。
何れや。何れや。何れや。何れや。何れや。何れや。何れや。
何れや。何れや。何れや。何れや。何れや。何れや。何れや。
何れや。何れや。何れや。何れや。何れや。何れや。何れや。

論語。孔子の曰。君子の事。易。説。難。之。
を説。其。人。を。使。之。
及。人。之。之。を。器。小。人。の。事。難。説。易。之。
を。説。其。人。に。道。を。以。て。之。説。其。人。を。使。

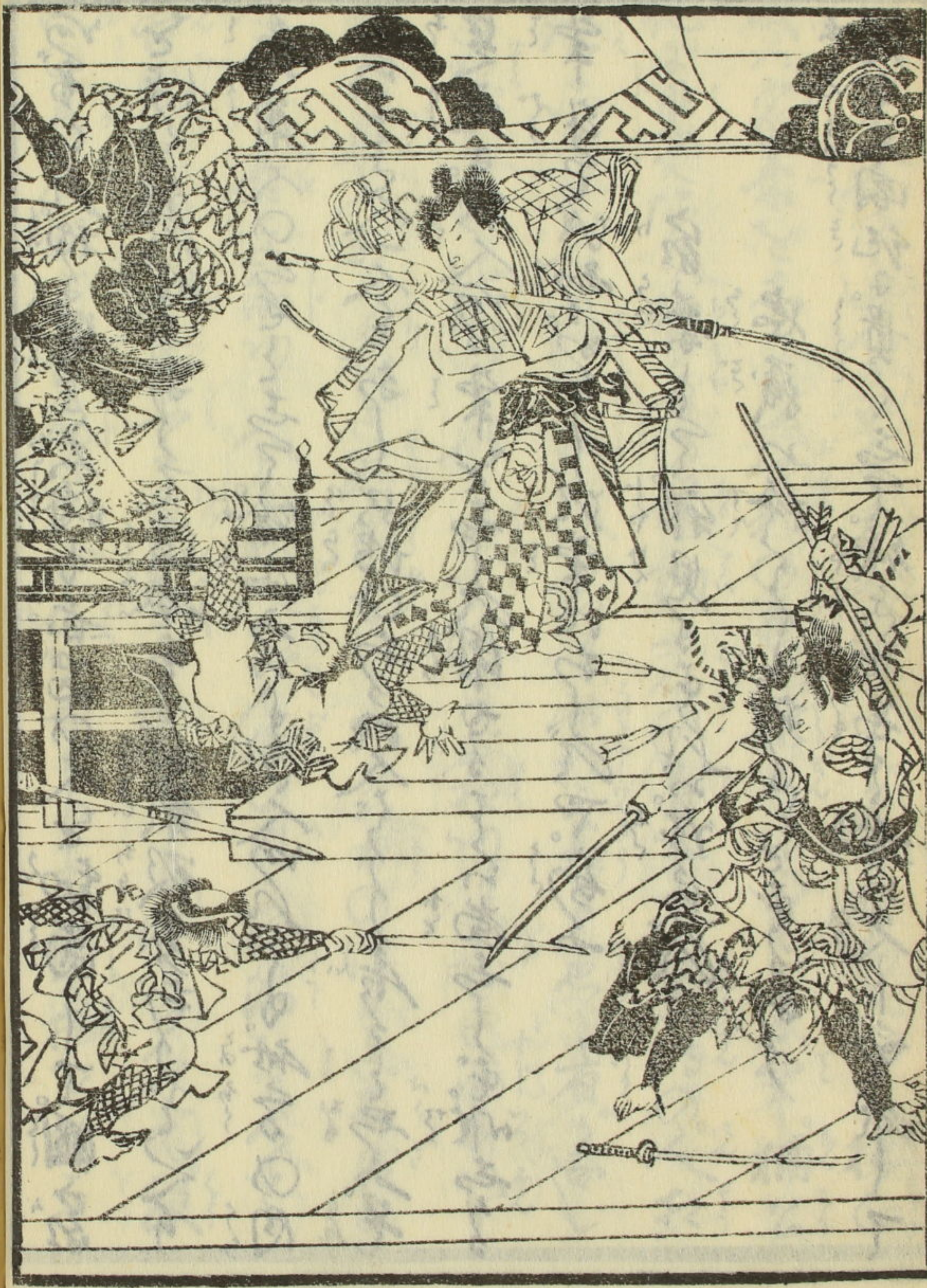
彼ありて。とさう此者相もりら大勢の修也あり
 て。守護し。とやまらぬ。の名なり
 護法常法論あり。願い尊し。是の果し。是の
 のそと愛し。是の年。此を傷て可あんや
 せし。世居理を治し。考ふよ
 二女周縁各教あり。世界ふ山あり谷あり。海あり。川
 あり。一切の事。物の平等あり。ぬさぬあり。人貴
 後貧福あり。人貴のさす。一切の有情の形。大小有
 情。有情の意。下あり。至七。山谷あり。國土のさす。あり。

他昔神や仙の山を築。食はし。せられたる。さあはる。ん
 鬼神仙人の仕業も。此の地。自然の姿あり。物も大
 小。下あり。一。一枚の平等に。此の物。の切用あり。ん
 なく。富も。物なり。一。一枚の富
 貴の人。さす。此の。万。準備。が。調り。ぬ。此の。人。が
 ありて。家。業。と。成て。是の。事。を。勤。む。此の。万。の。用。は
 細。く。事。あり。是。れ。上。の。元。世。の。恩。情。人。の。意。あり。
 下。人。と。成て。此の。事。を。盡。す。ん
 論。倍。の。事。家。以。造。る。ふ。此の。事。を。樂。と。あ。し。小。あり。

は極楽とありてこれ地蔵の下に捨つる者あり
せり。二道は事なる人の捨つる材木ありが如し。楠
正成が法男。正覺の物。美似の上。聖年の名人と抱く
を以てある者

陽田川鏡池傳より。大和の國。富田といふ所。満足
るなり。長者といふ者あり。先祖より傳く。珍愛する。
玉の盃あり。今日客の答。意より出。けり。前より下人
あやま。あれて。玉の盃をたより。客もあひま。と
伝ふ。其者の。顔色変。じ。地も。抱。く。て。る。

人の命をす。老も角もあ。ら。や。と。死を極。免。たる。覺
悟の作。目。も。あ。ら。ぬ。有。極。也。如何。あ。ん。と。あ。ま。り。に
の。長。老。一。向。し。る。色。も。あ。く。物。の。あ。ら。ん。と。い。ふ。も。元
より。定。り。たる。致。あり。修。た。く。と。せ。し。あ。の。あ。ら。ん。徳
と。せ。し。もの。あり。何。の。ほ。ん。と。あ。ん。と。い。ふ。も。酒。を
く。り。あ。ら。ん。客。も。と。も。あ。ら。ん。と。い。ふ。も。見。て。極。免。た。る
世。の。あ。ら。ん。と。い。ふ。も。あ。ら。ん。と。い。ふ。も。何。某。ら。の。あ。ら。ん。と
あ。ら。ん。と。い。ふ。も。あ。ら。ん。と。い。ふ。も。何。某。ら。の。あ。ら。ん。と
あ。ら。ん。と。い。ふ。も。あ。ら。ん。と。い。ふ。も。何。某。ら。の。あ。ら。ん。と



主君心持

口

その舊を好むをよみて新切を捨てる者凶しと云
信長光秀の好む終中をり。悉をるる半冠
雖の如しの聖言を忘れど光秀が類をよせぐは好む
有りたり

詩曰樂只の君子の民の父母あり民の好む所を
を好む民の悪む所を好む悪むを民の父母と謂
や有り
衆人のよまざる君子の民の好む所
あれを興へ民の悪む所を止むこれと民の父母と云
悉民を子の如くにせれば民も君を父母の如くせらる。

切ふあれば國家の泰平とや

小條九代記。兵書より。寛仁大度。唐く元を憂へ
天下諸人の争ひに背く事。天下と相俱ふ保つ事。あ
あつては安泰ふあつては。且格勢に思はれて。皆さつては
何れの礼を以て。考むの。一。何もおこり。悉くお
皆く半。是れ人智の常あり。平生俱ふに愛の人の必
わらざるも。此財も。相うらふ。お親む。是れ食く。
人情半にゆぐ。此方の仕方よりして他人も又即くの如し。
只人の嗜むべき。正道明路の。人智を大業あり。考む。

仁義礼の正道をふまざれば徳ひ起りたる時なげくは
早斐あつていけし時人忠用ふまげて款ある
忠信義士たはひ何れの中あつての心愛せざれば味方
あり愛さざる者忠義の信く家おを保つて根お也
根又人たる者お子の入用とくふと家業をぬた川
二面おとす。渠も人のふありとて家業をたつら
馬丸大納を敵軍東下向て前吉田の宿より旅籠や
の亭より下男を打擲するをうてある。
おそれある。彼も人のおひひを

おいとひひ子。おひらくくよ
享保の以安最某及重元漸役を勤られし州出社の
折高をうて階級をたはに。湯屋の十雑素足あり
おしげ。何れ由用いごうませぬと。おあつて徳利は
折屋をのふとゆりくと。由駕の内よりえおひ。石使は
曹の也。あれ主人の子。樽心海は
社者白の心よりいれざる民とあつてお中。款ひあ
又延享の以安最某及重元漸役を勤られし州出社の
折高をうて階級をたはに。湯屋の十雑素足あり
おしげ。何れ由用いごうませぬと。おあつて徳利は
折屋をのふとゆりくと。由駕の内よりえおひ。石使は

中絶と得てはひ玉は是は後なるあり無業は是に違ふ
あり息滅たふるがふ會のありとあはひるははるる
らぶらたの半あり。とくも。慈悲を牙と一。はら
たごくげむ會。河れ中庸のむげむらる。

拙むらふちの補ふ田とく。のちまをたるに。ほ
かしくたがふ。古傳より。にんげんが勇をまひ。義は
は長藤はありとあり。合せあり。又孔孟のらるる。は
官福と練。去る。元行相を用ひ。する。徳の長將。
河を。田が。拙中とく。むや。必勝の利ふ。く。ん。た。

蓋の我ものつらむ。又至忠の如妙なるもの。この
是非とあはむ。是子の人。義道ひと。と。と。せ

兵書より。君の徳。この女を。謀して。官に。換り。切。は
斗。と。當。と。加。入。飛。と。鳴。と。ふ。と。思。と。は。り。又。官。に
ある。其。女。の。長。短。を。下。り。賞。と。は。ひ。其。徳。と。換。り。に
も。下。り。更。く。は。究。ひ。て。極。を。極。と。し。切。と
吟。味。其。切。は。南。の。半。は。兵。河。より。其。徳。と。は。り。報。を。く
こ。あり。切。は。下。り。反。は。當。と。下。り。本。後。皆。同。一
を。大。名。義。中。へ。下。り。の。下。り。と。當。其。身。の。切。は。無。ふ

はるる半。要也人。切有て。當あ。時。士。卒。大。ひ。る。
倦。疲。る。と。し。り。是。と。志。れ。是。と。心。得。よ。

又人の家鹿を切強盗ありと盗人と斗りあをわら
む。其ららごめい。心。重。と。ん。を。只。ま。の。加。言。と。ん。と。肉。體。を
了。る。人。の。物。と。操。ぬ。私。曲。倭。奸。ま。し。こ。下。ひ。會。り。上。下
の。別。れ。痛。恨。と。あ。る。あ。り。緒。緒。ま。る。人。を。具。負。為。擔。
て。我。子。疎。を。と。畏。す。ら。彼。人。の。大。飛。之。物。を。吟。味。志。て。
紛。を。さ。る。も。あ。り。ま。る。半。中。一。あり。い。の。の。の。の。人
切。あ。し。ま。悔。む。ま。半。之。竹。賞。界。は。明。白。あ。る。

御明君あり。明鏡の如し。吾人を奉養して。押ゆる事。
上。ま。ま。人。の。職。分。也。免。角。賢。人。と。奉。用。ひ。さ。ん。は。空。虚
ま。る。あ。や。う。と。半。累。卵。の。如。し。重。子。下。も。仁。賢
と。信。ぜ。ざ。ん。が。國。空。虚。あり。禮。義。あ。り。時。ら。下。私。を
と。何。り。人。た。る。者。ら。以。用。せ。る。の。ち。て。衆。の。衆。陶。を
奉。湯。の。何。乎。と。奉。或。王。の。臣。十。人。有。て。天下。平。ら。あ。り。又
倫。借。せ。も。重。あ。り。もの。を。引。奉。て。用。ひ。枉。ま。る。者。を。ば
捨。錯。辱。し。若。れ。あ。る。者。也。引。ち。げ。用。せ。れ。ば。民。服。せ。ば
之。て。何。れ。要。事。を。引。出。し。者。と。必。も。ら。も。辱。ら。ず。也。也。人。

王符心符上

儒のつとふ。子夏万化鏡とて、人となりて學文を奉。
用ひ民を安んずるはわり。是書經の要文ありて、
たる者の職分。是を心得るべし。半世智を以て是を以
らふ。一に以て是を舟。勇を以て是を以て智。
勇の二徳を以て王家を治む。是ら多し。政事に入用
らして。家来の使ひ中。又
妻子と安んずる。又有一
安んずるの心得あり。是と考へて半く了。前例に
よる。是も心得あるあり。腹を以て考へて。是ら多し。
ありて。智恵あり。人びつ。いづれもたず。後とせぬ。いづ

腹はつとふ。正徳あり。是のやうにあり。人あり。後者
人の氣とさう。いづれも其人の言は入中。あり。後者
先の後者いづれ。あり。言者の遠ざかる。の基ひく。是れ
心も後人あり。あり。今日世を所人。百姓風情の者
は。又人の言を。氣。いづれも。遠く。是れ半を。あり。地
屋。一。後者。言と。斗り。も。いづれ。也。大。ひ。後者。人
の。後者。と。あり。は。多く。其人の。心。あり。あり。後者
ら。いづれ。也。後者の。為。あり。後者。心。も。あり。あり。あり
半あり。いづれ。後者。用ひて。いづれ。半。あり。遠。ざ。り。いづれ。也

三卷の書

七

ほとんが半く答を公人よそのおとぼけもよまらぬ
 人の万半ふまひやうがおくらる人得休せぬのこも
 取て教あるだかりにびちく引出—その後におく地
 ものくまがけい方式よりつりて種の人男故を心にけい
 度—此の家業の身のおぢとをぢの種をを種
 作が—くおぢの代悪い者の身の油とを海りて精出
 豆奴と油をとりてあまけりておぢとを人の脂の拵を以て
 毎日—くおぢの種をとりておぢの種をとりておぢの種
 けりておぢの種を見を用ひて油をぬる—とあり。此半

入用の人事—考へる—

又白人ありとて。家業をちかづるべし。人男一はあれ
 けり。前よ業の後はおとぼけ始るに—とあり。貧乏
 あり。脩環翻渡盛衰波のあらく—とあり。如た—
 ば日出れ月おくを。其子長ぶれば親没するが如し—
 各々覚悟あるべし。又—とあり。天地への御奉云云
 はまふく御奉云云。其業をぬるを。まき人と云々
 せむらあ—。只上下を—とあり。世を治免。吾半はあ
 のえとまらぬ。身んて悟んで候。あ。驕慢放埒の候

むしりてふ何の来りわんんはるるに半之。易の海庵の
風あり知らるの知せざるを也。良子の徳ら

大学曰。緡蠻たる黄鳥。丘隅に止る子。曰。止るに

於て其止る所を知人を以て。鳥はたもさうざるをん

やとてり。無心の鳥いんん鳥のあへて。昔もは。

い方の常の中あふもの。其いんん何のあへてあふもの

あれども。丘隅と險阻あり。野れ山は徳で。人おれり見ぬ

用ふをさる。そわおあひのさるをんん。徳も現や

くととて。身おお意のあふ。止るるるる。鳥いんん。おと

己おやと。孔子も。河坪刺。徳をぬる。若と志す。徳を

止る。信と志す。教を止る。子と志す。孝を止る。父

父と志す。慈おさる。常の徳ひの。至善を止る。徳

止る。徳を徳とす。徳の道。家来のお。徳の徳

を徳とす。是安んのお。徳を徳とす。の家あり

徳とす。徳を徳とす。徳の徳を徳とす。徳を徳とす。

徳とす。徳を徳とす。徳の徳を徳とす。徳を徳とす。

徳とす。徳を徳とす。徳の徳を徳とす。徳を徳とす。

大業の心得い人の心かへんとて。侍らるるらん只
 忠義の心を以て。存理の道にまじりて侍らざり。一
 人の心かへんと欲せれば。自然と表裏輪廓とな
 るもの。是より一の心。只忠義を身一とて。侍らるる
 御くべし。又家業たる者。人の恩惠のまじりて。を
 むるべし。昨日己が勤むべきを。大切に勤めて。其徳を
 たらが如く。よせよ。是福徳を天に祈りて。是に福徳を天
 に祈りて。亦ば。大いある利益を身へ下さるる。必ず業をさ
 して。心を失ふ。大業ふり。是は。聖人の御意あり。福徳は

天に祈りて。心を換ふの氣をひあ。能く祈りて。又
 天より利益を身へ下さるる。律儀より。人々大業を勤
 むる人。若しあれ。然るも。何ぞ。店持。聲入。善子。て。も
 ある。何の人。あり。能く。冥冥。交合の人。あり。と。人々。始め
 かく。の。者。と。も。い。ふ。所。の。善。子。聲。入。を。お。法。わ。り。て。さ
 分の。身。上。有。り。大。業。の。り。是。天。より。利。益。を。身。へ。下。さ。る
 あり。若し。あれ。の。心。を。換。ふ。の。氣。を。ひ。あ。と。て。侍。ら。る。る。者
 分の。善。子。を。下。さ。る。是。人。の。徳。あり。と。あ。ら。ん。天。の。御。意。あり。
 又。あ。ら。ん。者。の。心。を。換。ふ。の。氣。を。ひ。あ。と。て。侍。ら。る。る。者。の。善。子。聲。入

の口ももちの附見好と始免印くの首をもちの人の元
あひ先出せ活の出春ぬ利根もあて文覚の何れ其南堂
ふ実がいつべ又かくるい半のわり中く能せ活の出春
ほくあとしくむおや免もあるとも何り是人が邪たき
おわづえより附骨を尚遊落一あり思ら
後業し免角をほくで南堂家職と勤忍附し
福徳の春も期おえ一附骨を待もえくべあふ
笑がーと心の花もいそぎ
春のつら身とあづべー

たえ又も人が其働とあづべ半毎の用ひはた困月八
日の余人がしゝ知て居て捨金ぬ老く賀もあふ何れ
終業おれ世活するの必定也又余人のあづべは居るも
天道が其あまをえり捨金ぬ半あり一えに
え捨りぬ免角もあづべ居るに樂しき
えあづべ居るを樂しやにかりあづべ丈夫の人と
いづべ陰徳のれは必陽報ありといふ事を能く
陰徳といふ人ふあづべ用儀も善く行はれあづべ
あり世うられたる徳の人あづべもの天道のあづべ

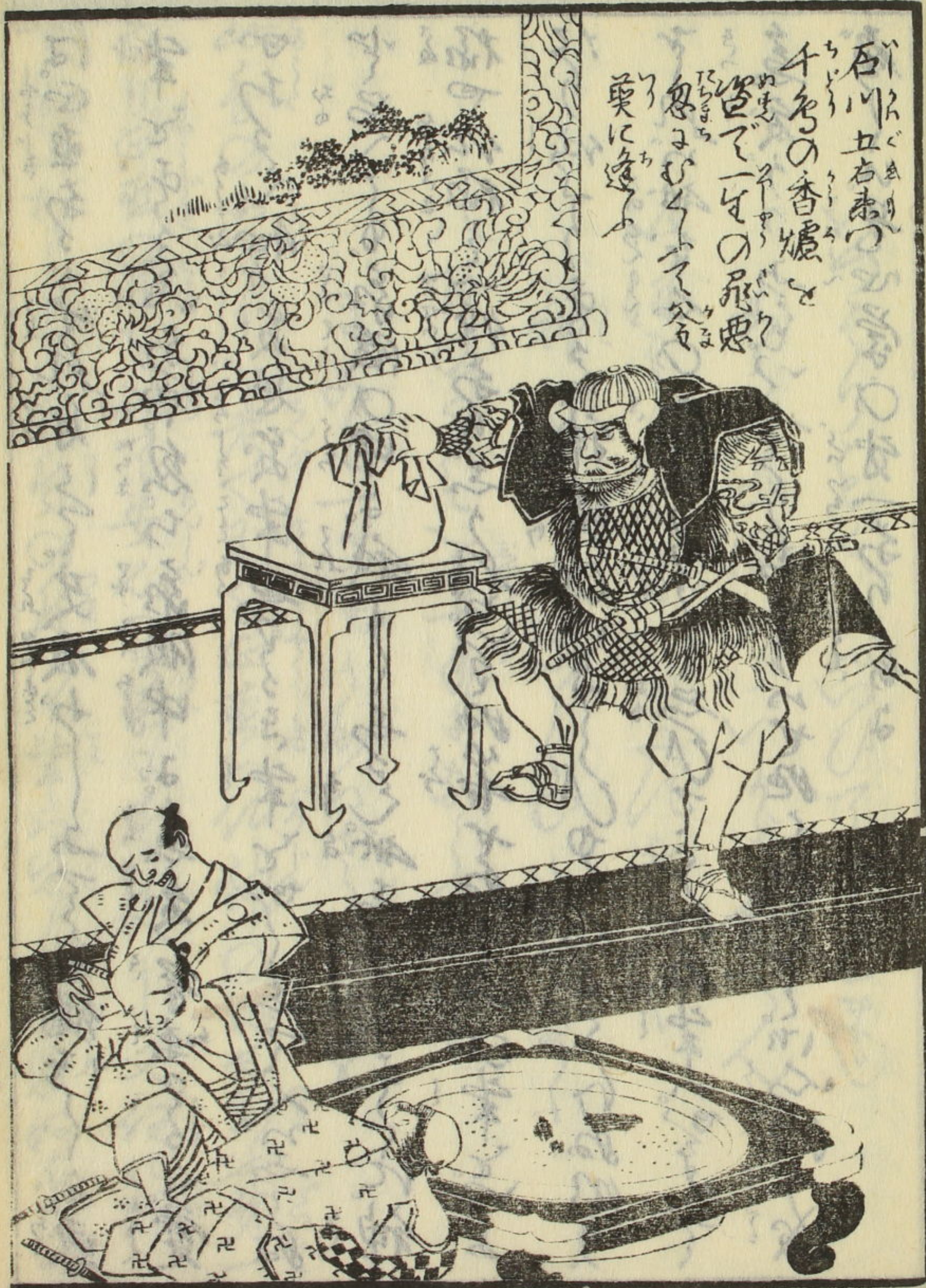
よの形来の地獄ありあり
と人とおぼくやま。あつて

其乃一紙と習ふ屋さゆり
何半も。兎角世男のわーと半

あつてまはつて。あつたーあえ
蜜とさる人そ移る。わーと半

はみよして。身のつまるや

前細ふつて。正妻の男。あつたーあえ
あつたーあえ。あつたーあえ



石川五右衛門
千名ノ香爐
盗て一疋ノ飛鷹
忽まひくして
菓に逢ふ

一 且善子亦仍これど追出されたらしくお音でくあつまいし。
人おらんすれがぶえをえたる斗りとなふまて裁子
万人おあられあやあれすせぬ世捨り面らかりしとて。
子万費の換と同く半でござる。世費用を知りすせ
ぬ。曾のおさすりい出素ませぬ行も唯徳恵の徳あり
入。昔勞と人の為あづくと世費用とあつあらん親の
とせしませむ。世費用のあら

費用づ。二やがらり月とあつて
一と九らやと。まるが身のたえ

恩とえし。一人の親を孝行せんばお百人お参らん
利便徳用いぐらもどや務てせし。妻女子をありは
わづろおたををいし。又世間の縁も是も同く。覺て
おちく。福神のあま

子忠親お孝行。あつあつ
兼業とや縁。縁も縁も
あしゆ。お親おがとて。後のこと
神も佛も。牙二牙三
正心大悟正のしとく。お親御通よつて。他をえん

人なり。是れ大吉の人あり。井の田は地といふ。まら〜り。
 是れ大吉の義孝の人のなり。あつた。
 他一歌あり。大方の吾人あり。
 又一切の吾輩と。まゝ。
 城の心より。出まら〜る。
 忠義孝好と。まゝ。
 是れ又。道は入の方便あり。
 是れ又。忠孝の。
 是れ又。忠孝の。
 仁義と。

つり。又。
 又仁心仁國ありて。其政あり。
 是れ忠孝の。
 其業を。
 是れ忠孝の。
 御方。
 下。
 の。
 又八百屋。

檀那不與たんなふよんくけり也なり。所ところ重おも侍しやくをけし縁ゆかりていりく
 彼輩かのたぐひ冥みやう頑がん隨したが下した塵ちん唯ただ應おこ憐あは念ねん莫な生せい顯けん若じやく
 能よ事じ如ごと君きみ意い自みづか他た將まさ身み作つく主ぬし人ひと
 所ところ侍しやくのらに彼輩かのたぐひの中人ちゆうじんといふ其その下した人ひとの皆みなおら、やして
 まう半はんの法ほふをた。此この半はんのつもせぬ。それとやに縁ゆかりを
 人ひとまうつりれて難がた養やうして居ゐる。何なにの事ことをわけてそを
 おやうあふれ。若ごと又また自みづか人のやうにらうとていさがあふ
 奉ほう公こういせもして。自みづか人ひととあふて。正ただ理りを合あふとて。
 其その能よ事じといふ半はんあふれとけり

人多おほき人ひとの中ちゆうあも。人ひとはあま
 人ひととあふ人ひと。心こころをせ人ひと
 身みを悟さとる。心こころをさうせて。是この形かたちはあふく。も
 是この形かたちふありなむ。一日いちにちの法ほふを。そをわは當あたり。そを函はに
 わらう。百ひやくち量りやうう。二に倍ばいが八はちちり目めをわけて
 二に倍ばい九くちあふ。さうが身みの為ためとて。其その用もちひ。そを
 度たへ。そを人ひとの心こころをさふ。
 能よ事じも。若ごとをけり。彼かのは。無ない。あふ。度たへ。そを
 一言いちごん。至いたる。大だい半はん。そと知しりて。常とこにけり。そを。大だい度た

を商ひふたし人愈にむくして。やまを中其ふん安
 事とありあり。又若半は道むの一馬しありとん
 同志の輩ふお法中の一。大智晴雲の君子。目く
 若半あり
 又昭波先生の。接育系。丁稚夜訓。廿八首といふ言の
 あり。實ふありて。披露するなり。因はつ子孫長久育
 心得ふ。世授育系。上下二巻。又自海先生の。前訓。結
 えて。孝悌忠信の道と教へ。子孫長久するの。根源
 とあり。

丁稚夜訓二十八首

奉公ふ。奉公の日の。ついでに。ついでに
 又よれ。お念と。いれて。はくし
 一人の。仰が。あつら。早達よ
 若半。よく。志す。由用。時と。先よ
 口と。いひ。ちぐ。あま。使ひ。ひら
 若半。びせん。ひよ。を。つれ。おあ
 喧嘩。ま。南カ。も。あ。解。西。の子と
 せ。が。う。も。あ。は。は。う。一。も。あ。あ



小童かと
あちまのあ

狐の門の通りと。用さくは
 ぬがもるふ。まさるを
 教く。あつとす。あつとす
 糸居の兎角。おれあつと
 我ひさう。はつとす。あつとす
 あちまのあちま。あちまのあちま
 食半と。あつとす。あつとす
 えんば人の。あつとす。あつとす
 ちとす。食半。あつとす。あつとす

伊豆く忠義新く孝行
 こそ掃除礼を配贈何半の
 ぶざらくふせぬ清くその
 卒地とえみするが何もうも
 しくも仕違ふ傳授ありける
 利口ありそ葉多きと行定地と
 履容不律義くせにそのまあ
 用半ありて是居をんるのころ
 度りてあましくせとる能合

正重く葉利のまればいれ人も
 傍常中もめりもが福あり
 高きとて覺くるが合しもの
 病く這入のえまとをあれ
 出せとせんとあつる身をつれて
 手代あらはくまねあつて因縁の
 使ひのあつてあつてあつて
 何半ゆ人がたのものと西人へ

獨史あり。大將士率わくごんで。未率も亦方よし
空あり。又 御時志六波羅より。總合將軍の御時志
五。惣として。百姓者。何ぞ仕居る。石洞法。志りり。平
あれ。あ。其者の。能得ん。白。後。改。先。せ。極。あ。
し。し。平。人。巧。者。の。巧。一。子。の。子。の。若。年。く。り。巧。く
心。抵。け。及。み。見。を。加。い。者。得。り。を。改。め。ぬ。者。の。あ。く。い。者。
角。人。の。あ。や。す。ら。い。半。む。り。中。で。あ。り。り。也。人。を。人。
得。遠。ひ。と。さ。し。人。び。く。く。い。極。子。あ。り。也。い。見。
す。で。能。勤。免。い。者。も。不。是。の。心。起。り。て。不。勤。ふ。す。り。

人。と。の。お。ら。ち。の。あ。い。し。い。半。是。合。く。矣。見。の。し。し。
方。何。し。と。い。人。を。捨。り。と。り。者。あ。て。い。扱。免。え。の。致。方。
は。先。を。者。を。得。出。し。一。人。側。に。取。成。い。者。を。若。お。の。者。を
あり。と。の。常。し。り。も。云。葉。を。や。り。げ。者。子。を。方。の。扱。
の。辭。何。の。手。扱。と。し。し。何。の。若。能。勤。い。極。と。其。者。の。心。抵。
あ。れ。と。い。免。を。得。る。者。の。不。洞。法。の。そ。方。も。似。合。さ。る。
半。と。能。く。し。使。せ。世。の。後。お。改。め。く。の。通。り。心。能。勤。い。
中。あ。も。是。く。し。し。と。い。せ。い。極。が。そ。利。子。あ。く。し。身。の。得。り
と。得。り。と。い。お。改。め。い。者。も。て。い。人。巧。者。一。人。に。く。い。

御時志六波羅

五

法の為人の爲に。益ある事とひあり。悪を興ふ所と
 法と云ふ害の事。亦とひあり。たゞくは人の如し。たゞ
 一用也れば。身は河に流る。金を考へて。大ひは益あり
 一用也れば。家を焼く。身は火に焼く。大ひは益あり
 一害あり。宜に準例とて。初る處に。以下の巻も
 一合点とて。

〇此の法は、人の善悪を、
 〇此の法は、人の善悪を、
 〇此の法は、人の善悪を、
 〇此の法は、人の善悪を、

